

夢を追う子

W・H・ハドソン 作

西田 実 訳

駒井 哲郎 画



夢を追う子

W・H・ハドソン 作

西田 実 訳

駒井哲郎 画



福音館書店



夢を追う子

一九七二年二月一五日 初版発行

一九八〇年二月一五日 第九刷発行

訳者 西田 実

発行 福音館書店

郵便番号一〇一

東京都千代田区三崎町一丁目一番九号

電話(〇三)二九二一三四〇一

振替東京五一七六四五

印刷 精興社

製本 黒岩大光堂

・無理な扱いをしないのに、お買い上げ後一週間以内にこわれたような本
がございましたら、お買い上げ月日、書店名をご明記のうえ、おそれ
りますか、本社にご返送ください。責任をもっておとりかえいたします。

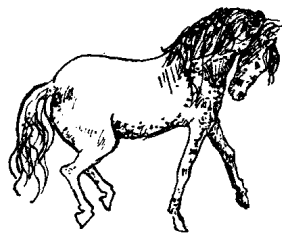
・NDC九三三／二六ページ／二一センチ

も
く
じ

第一章	大平原の家……………	1
第二章	ヘラサギと雲……………	9
第三章	しんきろうを追って……………	19
第四章	つんぼのおじいさんに見つけられたマーチン……………	25
第五章	しんきろうの国の人びと……………	37
第六章	土人に出あったマーチン……………	57
第七章	森の中にただひとり……………	67
第八章	花とヘビ……………	75
第九章	空とぶ黒い人……………	85
第十章	野生の馬の群れ……………	97



第十一章	山の精 ^{せい}	113
第十二章	地下の小びとたち.....	121
第十三章	大きな青い海.....	133
第十四章	山のふしぎ.....	141
第十五章	マーチンの目が開く.....	151
第十六章	霧 ^{きり} の中の人びと.....	161
第十七章	海の老人 ^{ろうじん}	171
第十八章	波とたわむれるマーチン.....	183
	ハドソンの手紙.....	198
	訳者あとがき.....	203



第一章 大平原の家



大きくなって何になりたいか、人によっていろいろちがいます。世の中にはしごとがたくさんあって、その種類しゅるいもさまざまで、だから職業しよくぎようの数もずいぶんあります。羊飼ひつしかい、軍人ぐんじん、船乗り、農夫のうふ、馬車ひき、とあげていくと、一日じゅうかかっても数えきれないくらいです。わたしは、子どものころからおとなになるまで、生きていくためにいろんなしごとをして働はたらきました。そのほか、じぶんでやりたくてしたしごとと、いくつかあります。ところが、どういうわけか、何をしても、ぴったり自分に合ったしごとのように思われたことがありません。どうも氣にいらぬのです。いつでも、何かほかのことをしたいと思っていました。たとえばわたしは、大工だいこくになりたいと思いました。かんなくずやおがくずの中で、しごと台に向かって、びかびか光る美しい道具を使って、いいにおいのする材木ざいもくでいろんな物を作る。これほど清潔せいけつで、健康けんこうで、きれいなしごととはほかにないような氣がしたのです。さて、こんな話はこの物語と、ぜんぜん、あるいはほとんど、関係かんけいのないことです。これはただ、物語の前おきに書いたので、わたしとしては、こんなふうに話をはじめただけなのです。それから、もうひとつわけがあります。それは、彼かれのおとうさんも大工だいこくだったことです。彼かれというのはいち、迷子まいごのマーチンのことです。そのおとうさんの名前はジョンといいました。とてもいい人で、そして腕うでのいい大工だいこくでした。大工だいこくのしごとをするのがほかの何よりもすきでした。じつはわたしだって、そのしごとをおそわれば、マーチンのおとうさんに負けなくらいすきになったでしょう。彼は、イギリスのサウサンプトン

という海岸の町に住んでいました。そこには大きな港みなとがあって、大きな船が世界じゅうの国々へ
いったりきたりしていました。さて、そんな港町みなとまちに住んでいる強い勇敢ゆうかんな人が、船を見たり、船
で旅をした人から、遠い国で暮くらした話を聞いたりすれば、自分でもそういう遠い国々へ行って
みたいと、思わないではいられません。イギリスでは、冬になると雨ばかり降ふって、東の風が吹ふ
いて、空は灰はいいろで寒くて、木の葉が一枚まいもなくなります。そんなところに住んでいると、夏の
鳥のように、どこか遠い国へ、空がいつも青くて、太陽たいようがまいにち明るく暖あたたかくかがやいている
ような国へ、飛とんでいけたらどんなにいいだろうと、思わない人があります。しょうか？ そういう
わけで、とうとうジョンも、年をとってから店を売って、外国へいきました。彼かれらは、何千マイ
ルも離れた遠い国へいきました。彼かれらというのは、ジョンのおかみさんもいっしょだったのです。
船の旅が終わると、彼かれらは馬車に乗って、何日も何週間も旅をして、住みたいと思っていた国へ
やっとたどりつきました。そしてそのさびしいところで、二人は家をたて、野菜畑さいばいけをつくり、く
だものくだものの木を植うえました。それは荒れ野のようなところで、近所にはだれも住んでいませんでし
た。けれど、土地はほしただけあるし、天気はいつも明るくて氣持がよかったです。二人はとて
もしあわせでした。ジョンは大工道具だいこうぐを持ってきていて、氣が向けばいつでもしごとができたし
た。でも、二人が何よりかわいがって心にかけていたのは、子どものマーチンのことでした。
しかし、マーチン自身はどうだったのでしょうか？ 話し相手あいてや遊び仲間なかまがほしくて、家の近

くには子どものすがたさえ見えないのでは、さびしくてたまらないだろうと、みなさんは思うでしょう。ところが、ぜんぜんそんなことはありません。こんなしあわせな子どもはどこにもないくらいでした。友だちがいなくてこまることなどありません。遊び仲間には、犬やネコやヒヨコがいましたし、そのほか家のまわりにいる動物なら、何でも友だちだったのです。しかし、なかでも彼がいちばんかわいがっていたのは、日なたの花の中に住んでいる、小さなおとなしい生き物たちでした。たとえば、門の外、背の高い野生のヒマワリの間によく見かける、小さい鳥やチヨウチヨウや、ちびの動物や、はって歩く動物などでした。ヒマワリのはえているところは、何エーカーもある広さで、どのヒマワリもマーチンより背が高く、キンセンカぐらいの大きさの花がいっぱい咲いていました。このヒマワリの花の間で、マーチンはほとんど一日じゅう、遊んで暮らすのが楽しくてたまりませんでした。

マーチンには、そのほかにも楽しみがありました。おとうさんのジョンは、年をとってもまだ大工しごとがだいすきでしたが、おとうさんがしごと場へいくときにはいつでも、マーチンも中へかけこんで、おとうさんの相手をして遊ぶのでした。彼の好きな遊びのひとつは、いちばん長そうなかんなくずをひろっては、首や腕や足に巻きつけることでした。そして彼は、まるで羽根飾りをつけた子どものインディアンのように楽しく、うれしそうに笑いながら踊るのです。

おもちや屋がたくさんあって、どれでも好きなように選べるロンドンの子どもから見れば、か

なんなくずなんて、じつにつまらない遊び道具に見えるかもしれませんが、でもなんなくずはほんとうは、じつにきれいなおもしろいものです。つやつやして、さわるとすべすべしていて、波形の美しいすが何本もついています。くるくるねじれた形は、ほかのものに巻きつく植物^{しよくぶつ}みたいですよ。そのほか、ブドウなどをささえているつるや、花びらの曲^{まが}がっている花や、そりかえった葉っぱや、貝がらや、いろいろな美しい自然^{しぜん}の動植物^{どうじよくぶつ}にも似^にています。

ある日マーチンは、顔を赤くして、うれしそうに家の中へかけこんできました。エプロンの中には何か重そうなものを入れて持っています。

「こんどは何を持ってきたんだい？」おとうさんとおかあさんは、同時に叫^{まゆ}んで立ち上がると、マーチンがだいじそうに持っているものをのぞきこみました。マーチンはいつも、とんでもないかわったものを持ちこんでは、両親に見せるのでした。

「かわいいかんなくずだよ。」マーチンはいばっていいました。

エプロンの中を見ると、緑^{みどり}いろのまだらのへビが気持よさそうにとぐろを巻^まいているので、二人はびっくりしてふるえ上がりました。へビのほうでも、のぞかれるのが気にいらなくなくて、へんなハート形の首を持ち上げると、ふたまたの小さな赤い舌^{した}を、二人のほうに向けてべろべろ振りました。

おかあさんは、きゅと大声で叫^{まゆ}ぶと、手に持っていた水差し^{みずさし}を床^{ゆか}に落としました。おとうさ

んは走って行って、大きな棒をとってきました。「すてろ、マーチン、かまれないうちにその悪いへビをすてるんだ。わしがすぐに殺してやるから。」

マーチンは、両親が大きな棒をしているのを、びっくりして見つめていましたが、やがて、まだエブロンのはしをかたく持ったまま、くるっとふり向くと、へやからとびだして、いちもくさんにかけていききました。おとうさんも、手に棒を持ったままそのあとを追って、門の外へ出しました。そして、マーチンがすたをかくした、背の高い野生のヒマワリの茂みの中へ、とびこんでいきました。おとうさんは、しばらくさがしまわったすえ、逃げだしたちびさんが、草の間の地面にすわっているとところを見つけました。

「へビはどうした？」おとうさんは大声でたずねました。

「いっちゃったよ。」マーチンは小さい手を振り回しながら答えました。「放してやったんだから、さがしちゃだめだよ。」

ジョンは子どもを抱き上げると、大またで歩いてへやへもどり、床の上へ投げけるようにおろしてから、きつくしかりました。「毒へビにかまれなかったのがめっけものだ。へビと遊ぶなんて、いたずら小僧め。へビは危険な悪いやつだ。かまれたら死んでしまうんだぞ。さあ、まっすぐに寢床へいきなさい。おまえのようにむてっぽうなお調子ものには、こういう罰でもしてやらなければ、ききめがないのだ。」

マーチンは、顔をしかめて泣きそうになって、こそそと自分の小さいへやへはいつていきました。昼間、まだ眠くないのに、そして外では鳥やチヨウが日光をあびて楽しく遊んでいるのに、寝なければならぬなんて、こんなつらいことはありません。

「あの子をしかつてもむだですよ。わたしは、とつくのむかしから知っています。」ジョンのおかみさんは首を振りながらいいました。「ねえジョン、わたしはときどき、あの子がわたしたちのものではないような気がしてならないのよ。」

「それじゃ、だれの子だと思うんだ？」ジョンは、水を入れたコップを手に持っていました。マーチンを追いかけて、からだが熱くなったので、冷たいものがほしくなったのです。

「それはわからないけれど、でもわたしは、一度とてもへんな夢を見たのよ。」

「だれだって、へんな夢を見ることはよくあるさ。」年をとって賢いジョンは答えました。

「でも、これはほんとにへんな夢なの。それでわたしは、この夢で見たことがほんとに起こらないなら、夢なんてたいした値うちがない、と思つたくらいよ。」

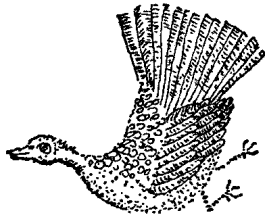
「夢に値うちなんかあるものか。」ジョンはいいました。

「あれはまだわたしたちがイギリスにいて、ちょうど旅のしたくをしているときだったわ。鳥がいなくなるころだから、秋だね。夢の中でわたしは、ひとり出ていって、海のそばを歩いていたの。ツバメがたくさん通りすぎて、海の向こうへ飛んでいくのを立って見ていたのよ。ど

こか遠くの国へ飛んでいくのをね。そのうちに、一羽の鳥がだんだん低くおりてきたので、地面にとまりたいのかと思った。じっと見ていると、その鳥はわたしのほうへまっすぐおりてきて、とうとうわたしの胸の中へ飛びこんできたの。手をあててよく見ると、マーチン（英語でイワツバメのこと）じゃないの。のどと胸がまっ白で、背中にも白いところがあつたわ。そのとき目がさめたのよ。おまえさんはあの子にジョンという名をつけたがつたけれど、わたしがマーチンという名にきめたのは、その夢のためなのよ。いまでも、ツバメが飛びまわって、家のまわりをいったりきたりするのを見ていると、マーチンも、あの夢の中のイワツバメのようにしてここへきたんだ、と思うことがあるの。そして、いつかまた、ここから飛んでいくのじゃないか、と思うのよ。もっと大きくなってからね。」

「もっと小さくなってから、だろう。」ジョンは笑いながらいいました。「とんでもない。あの子はツバメになるには大きすぎる。秋の祭に食べる大きなガチョウだって、あの子とはくらべものにならないさ。さあさあ、こうして、おまえのばかげた夢の話なんか聞いてはいられない。メロンやキュウリに水をやらなければ。」そういつて彼は、野菜畑へ出ていきましたが、まもなく戸口から首をつっこむと、こういいました。「起きたければ起きろといってやれ。かわいそうに。ただ、これからもう、マダラヘビなんぞを相手に遊んだり、家の中へ持ちこんだりしないと約束させるんだ。どうもわたしはヘビがすきじゃないからな。」

第二章
ヘラサギと雲



マーチンもだんだん大きくなって、もう七つに近く、力も強くなりました。遊びにいく場所も広がって、かきねのある果樹園^{かじゆえん}や、門の外の荒れ野^あの、もっと向こうまで足をのばすようになりしました。この荒れ野^あには、草がぼうぼうはえていましたが、そこにはまた、マーチンのいちばんすきなヒマワリや、大きな赤いふさをゆらゆらさせている野生のケイトウや、どんな大男よりも背^せの高い、黄いろい花のカラシナや、大アザミや、まだらの葉っぱの野生のカボチャや、黄いろい風鈴^{ふうりん}のような花の、毛のはえた大きなジギタリスや、羽根^{はね}のようなウイキョウや、赤く光る種^{たね}でいっぱい、ちくちくするいがあるチョウセンアサガオなどがありました。こい緑いろ^{みどり}のチョウセンアサガオには、蠟^{ろう}のように白い長い花が、夕方だけ咲く^{さく}のでした。マーチンが、何か高い物の上に乗って、こういう花の上からもっと向こうを見ようと思っても、どうしてもだめでした。やっとのことで花の間を通りぬけて、その向こうがわへいってみると、そこには、ほとんど木が一本もはえていない草ぼうぼうの広い原っぱが、見渡^{みわた}すかぎり広がって、遠くは青くかすんでいました。マーチンはおどろいて、この広い原っぱをうれしそうに見つめました。果樹園^{かじゆえん}と荒れ野^あのうしろは坂になっていて、その坂の下には川が流れていました。そして、つやつやしたこい緑いろ^{みどり}の茎^{くき}の大きなイグサや、黄いろいスイレンがいっぱいはえていました。しめった川岸にはそのほかに、高いかわいたところでは見られない花がいろいろ咲いていました。ブルー・スターや、赤と白のビジョザクラや、あらゆる色のスイート・ピーや、かわいい赤いビネガ

「の花や、「天使の髪」という花や、「メリーの涙」という名の、いいにおいの小さなユリなどが咲いていました。また、あちこちに大きなショウブが、川べの原っぱの草より高い、黄いろい花をひらひらさせていました。

毎日のようにマーチンは、川まで走って行っては、花をつんだり貝がらを集めたりしました。川のほとりには、茶いろのからに紫のしまのついた、かわった川カタツムリがたくさんいたので、彼はまた、イグサの中に巣を作る小鳥を見るのもすきでした。

こういう小鳥の中で、マーチンにかわいがられていることを知らないらしい鳥が三羽いました。彼が川の近くにすがたをあらわすと、彼らはたちまち大さわぎして、ばたばた飛びたっていました。その中でいちばん美しい一羽は、背中が緑いろのちいちゃな鳥で、頭のとっぺんにまっ赤な毛がはえていて、あざやかな黄いろい胸には、黒っぽいピロードのようなしまがついていました。この鳥は銀の鈴のような澄んだ声で、やさしく低く鳴くのでした。二ばんめは、灰いろと黒のまじった、元氣のいいちびさんで、大きな声でおこったようにくくくと鳴き、はばの広いしっぽを、まるでスペインの女が扇をいじるように、いつもあけたりしめたりするのでした。三ばんめは、おどおどした、ふしぎな、茶いろい小鳥で、茂った葉の間から顔をのぞかせては、時計がしずかに鳴るような声をたてていました。この三羽がいっしょにいと、まるで、イタリア人と、オランダ人と、インド人の三人の小びとが、めいめい自分の国のことばで同時にしゃべって